

若松寛先生を偲ぶ

## 若松寛教授を偲んで

### In Memory of Professor Hiroshi Wakamatsu

橋 本 勝

(大阪外国語大学名誉教授)

HASHIMOTO Masaru

(Emeritus Professor, Osaka University of Foreign Studies)

本学会元会長の若松寛氏（京都府立大学名誉教授）が、令和元年5月8日に逝去された。その訃報に接したのは亡くなられて半年近く経過していたが、にわかには信じられなかった。近年、お目にかかる機会もなかったが、毎年、賀状のやり取りをしており、迂闊にもお元気のことと思ひ過ぎしていた。返す返すも残念に思う。今、思えば若松さんと初めて出会ったのは私が京都大学大学院に入学後、確か昭和40年頃で、東洋史講座の萩原淳平助教授担当の授業であったように記憶している。『蒙古源流』(Erdeni-yin tobči) の講読ではなかったかと思う。原文よりローマ字転写されたプリントが配布されていたのを覚えている。その時、恵谷俊之、小田壽典、若松寛、間野英二などの諸氏が出ておられた。その後、京都大学文学部内陸アジア研究所(羽田記念館)から『五体清文鑑訳解』上巻(田村実造、今西春秋、佐藤長共編)(1966年)、下巻(総索引)(1968年)が出版される。上巻では若松さん(当時京大文学部助手)はモンゴル語転写を分担され、下巻ではモンゴル語索引作成、校正を分担された。下巻編纂の時、編者からのお声掛けを受け当時言語学専攻の院生であった私も校正に加わるようになった。このことも若松さんと個人的にお近づきになる切っ掛けになったように思う。このころ私は今西春秋先生(当時天理大学教授)の「満州語」、佐藤長先生の「チベット語」を受講していた。満州語は羽田亨編『満和辞典』、チベット語はH.A.Jäschke, *Tibetan-English Dictionary*を利用して授業に臨んだ。東洋史関係の先生方、先輩学友と親しくしていただく機縁になった。また「野尻湖クリルタイ」が発足し1964年に第1回が開催されたが、私は1967年7月開催の第4回に初めて参加した。若松さんも時々参加されていたように思う。内陸アジア研究所(羽田記念館)での講演会、学会などでもお会いすることがあったが、日本モンゴル学会が1971年に設立して以降、お会いする機会が多くなってきたようだ。京都大学から京都府立大学に移られたのち同大学で幾度か、日本モンゴル学会は開催された。若松さんは、その後長年教授として務められた京都府立大学を退職され京都学園大学に移られることになる。

日本モンゴル学会の初代会長は京都大学名誉教授の岩村忍先生であったが、そのあと坂本是忠教授、次いで村上正二教授、小澤重男教授と続き2001年度より第五代の会長に若松寛教授が就任した。

それとともに長らく東京外大にあった事務局は大阪外大モンゴル研究室に移ることになり私が事務局代表となる。若松会長になり紀要も刷新され学会誌の内容の充実、年2回の大会での研究発表の充実にも努められた（2008年5月退任）。若松さんが会長になられて数年後のことであったが、フフホトでの蒙古学国際学術討論会に出席のため関西国際空港から北京経由で内モンゴルまでご一緒したことがある。北京空港では中央民族大学のハスエルデニ教授のお出迎えを受けた。私たちはその日の夕食はハスエルデニ教授と共にした。北京のホテルで1泊して翌日北京空港から予定の便でフフホトへ向け飛び立って、いよいよ内モンゴルのフフホトの上空まで来たところが、生憎、同地方は30年ぶりの大雨とかでフフホト空港に着陸できず北京に引返してしまった。やむなく北京でもう1泊することになる。翌日、空港に向かい指定された便に搭乗してやっとフフホト空港に無事降り立った。学会までかなり日にちがあり嘗て大阪外大大学院で学んだ内モンゴルの数人の教え子たちの好意で彼らとともにシリングル盟へバスで旅行することになった。シリングル草原で皆で車座になって歌をうたい飲食をともしたり、夜は訪れた地で歓迎の宴に招かれ伝統的な儀式のもとでモンゴル料理を御馳走になった。シリングル地方の旧跡などを訪れたが、特に印象に残っているのは元の夏の都、上都の旧跡を訪れたことである。その付近を歩きながら若松さんたちとフビライ・ハーン時代、元朝の盛衰に思いをはせた。こうして我々一行は2日程の楽しいシリングルの旅を終えて夜中シリンホト駅で汽車に乗り翌朝フフホトに到着した。その翌日から蒙古学国際学術討論会に参加することになる。若松さんと私は学会のそれぞれの部会で予定の研究発表を終え学会のすべての日程を無事終了した。フフホト空港で教え子たちの見送りを受けてフフホトを立ち北京経由で帰国した。若松さんはご専門のモンゴル史に関する多くの論文を発表されているが、著書として『清代蒙古の歴史と宗教』（黒竜江教育出版社）、『アジアの歴史と文化7 北アジア史』（編著、同朋社）他がある。また訳書として『ゲセル・ハーン物語』、『ジャンガル』（モンゴル英雄叙事詩）、『マナス 少年篇』『マナス 青年篇』『マナス 壮年篇』（キルギス英雄叙事詩）そして『バラガンサン物語』（モンゴルの滑稽ばなし）（以上いずれも平凡社東洋文庫）がある。いずれも的確な訳注が付けられている。同氏の周到、緻密で厳しい研究姿勢がここにも表れている。

京都府立大学ご在職中に、大阪外大地域文化学科モンゴル語専攻後期課程（大学院含む）の授業を数年にわたり講師として平成11年度まで担当していただいた。また平成15年度大阪外国語大学学術講演会（石浜文庫記念）が11月21日、同学内で開かれたが、学外から若松氏（当時、京都学園大学教授）を講師としてお招きし「モンゴル英雄叙事詩の世界—草原を駆け巡った武勇伝—」という演題で講演をしていただいた。学内からは私の講演「『元朝秘史』（チンギス・カン実録）の言葉をめぐって」が加わった。若松さんは、この講演で1. モンゴル三大古典文学、2. 『ジャンガル』とはどんな作品か、3. ジャンガルの槍崇拜をめぐって、4. 『ジャンガル』中のブンバ国号をめぐって、といった順でジャンガルを中心にモンゴル英雄叙事詩について分かりやすく解説くださった。なお当日、来賓として故石浜純太郎先生のご子息石浜恒夫氏（作家）夫人とお孫さんの石浜紅子さん（エッセイスト）が臨席された。その後も若松さんは来学される機会があり博士論文の審査に加わって頂いたこともある。学会終了後の懇親会、二次会でもよくご一緒し夜遅くまで楽しく過ごしたことなどが今懐かしく思いだされる。長年にわたり大変お世話になり、ありがとうございます。当学会の運営へのご尽力に対して、またご生前に頂いたご厚誼とご高配に深謝しつつ、心よりご冥福をお祈りいたします。

（令和元年12月29日）